

漢晋期における馬蹄形帯金具の分析に関する視点

劉 徳 凱

はじめに

馬蹄形帯金具は、中国の漢晋期（紀元前2～後4世紀）の帯金具であり、平面形状が馬蹄形を呈する。材質は金銀を主とし、金銅製や玉製も少量出土する。馬蹄形帯金具には龍文などの文様が施されており、その分布は中国の各地域および朝鮮半島北部でもしばしばみられる。近年、公表資料が増加するとともに、この遺物に対して系統的な研究をおこなうことが可能となりつつある。したがって本稿では、馬蹄形帯金具について考古学的な検討をおこないたい。

1 馬蹄形帯金具をめぐる研究史

(1) 馬蹄形帯金具の呼称

馬蹄形帯金具の呼称は中国と日本で異なり、材質または文様を「帯扣」の前につけるのが中国学界で一般的である。例えば孫機は、それを金帯扣、銀帯扣および玉帯扣と呼んだ（孫 2013）。町田章は、形状と製作技法に基づき、鉸具あるいは馬蹄形打出鉸具と呼称していた（町田 1985；2006）。志賀和子は、材質と製作技法を踏まえて馬蹄形帯金具を金銀製打出鉸具と呼び、8例の年代と歴史的背景を詳しく分析した（志賀 1994a）。藤井康隆は、安郷劉弘墓例と上海博物館所蔵例を「馬蹄形獣文帯金具」、「玉製帯金具」と呼んでおり、後者は馬蹄形帯金具と晋式帯金具の系譜的關係をつなぐものが指摘されている（藤井 2014）。

(2) 地域間の交渉

馬蹄形帯金具から地域間の交渉を検討する研究に関し、周昞美は石岩里9号墓例が本土文化の産物で、楽浪郡の工匠や匈奴人が製作したものと指摘した（周 2007）。大谷育恵は、有翼の馬を表現する馬蹄形帯金具を集成し、北緯50度以北のユーラシア大陸で帯状に分布しており、地域間の結びつきを示す重要な遺物であることを指摘した（大谷 2013）。林梅村は、新疆焉耆出土例が中原地域の帯金具とは全く異なり、匈奴の烏禪幕部族の工匠が天山に遷居した後の産物であり、遼寧省の大連営城子漢墓と朝鮮石岩里9号墓から出土した帯金具は、いずれも烏桓により匈奴の墳墓を盗掘した遺物が論じられている（林 2017）。

表1 馬蹄形帯金具一覽

番号	名称	出土地	材質	副葬年代	縦幅	横幅	文献出典	分類
1	貞柏洞 37 号墓例	朝鮮平壤市	銀	66BC	6.8	11.5	朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会 1989	A
2	石寨山 7 号墓例	雲南省晋寧市	銀	前漢中期	6.1	10.1	雲南省博物館 1959	
3	石寨山 12 号墓例	雲南省晋寧市	銀	前漢中期	6.1	10.6	張增祺 1998	
4	メトロポリタン美術館所蔵例③	—	金	—	5.7	9.5	Emma. et l 2002	
5	牡宜遺址 4 号墓例	雲南省文山州	金	前漢中末期	7.1	11.6	萬楊 2019	B
6	羊甫頭墓地採集例	雲南省昆明市	金	前漢中末期	5.5	10.8	雲南省文物考古研究所ほか 2005	
7	貞柏洞 92 号墓例	朝鮮平壤市	銀	前漢中末期	7.6	11.1	社会科学院考古学研究所田野工作隊 1983	
8	貞柏洞 2 号墓例	朝鮮平壤市	銀	14BC	7.2	12.0	社会科学院考古学研究所田野工作隊 1983	
9	石岩里 219 号墓例	朝鮮平壤市	金	前漢中末期	6.7	11.6	樞本社人ほか 1975	
10	メトロポリタン美術館所蔵例①	—	金	—	7.3	11.7	Emma. et l 2002	
11	メトロポリタン美術館所蔵例②	—	金	—	7.6	12.4	Emma. et l 2002	C
12	營城子 2003M76 号墓例	遼寧省大連市	金	新葬	6.6	9.5	大連市文物考古研究所ほか 2019	
13	石岩里 9 号墓例	朝鮮平壤市	金	5AD	6.3	9.4	韓国国立中央博物館 2001	
14	焉耆博格達沁古城例	新疆焉耆県	金	前漢末期～新葬	6.0	9.8	韓翔 1982	
15	天水市博物館所蔵例	甘肅省天水市	金	新葬	6.6	9.6	劉復興 2017	
16	劉延墓例	安徽省淮南市	金	後漢永元元年(89)	7.0	9.2	許建強 2014	
17	劉弘墓例	湖南省常德市	金	西晋光熙元年(306)	5.6	9.0	安郷県文物管理所 1993	
18	Miho Museum所蔵例	—	金	新葬～後漢前期	5.9	9.5	Miho Museum1998	
19	個人コレクション例	—	金	—	5.9	9.0	Emma. et l 2002	
20	Pierre Uldryコレクション例	—	金	—	5.2	8.8	藤井和夫 2006	
21	夾馬營路C3M15墓例	河南省洛陽市	玉	後漢末期	5.6	8.5	洛陽市文物工作隊 1984	D
22	台北故宫博物院所蔵例	—	玉	—	7.0	10.4	孫機2013	
23	上海博物館所蔵例	—	玉	—	6.5	(9.9)	王正書 1999	
24	老河深 105 号墓例	吉林省榆樹市	青銅鍍金	前漢末期～後漢	7.3	11.2	吉林省文物考古研究所 1987	E
25	老河深 56 号墓例	吉林省榆樹市	青銅鍍金	前漢末期～後漢	7.1	11.4	吉林省文物考古研究所 1987	
26	ツライノール 1 号鮮卑墓例	内蒙古呼倫貝爾	青銅鍍金	後漢	6.5	10.0	鄭隆 1961	
27	討合気墓例	内蒙古フフホト市	鉄地金張	後漢	6.4	9.4	伊克堅ほか 1984	
28	和林格爾県鮮卑墓例	内蒙古フフホト市	鉄地金張	後漢	6.4	10.2	陸思賢 1984	
29	メトロポリタン美術館所蔵例④	—	青銅鍍金	—	7.0	11.1	Emma. et l 2002	

*縦幅・横幅 (cm) は帯扣金具を計測、縦幅が帯扣金具の弧形を取る一端の数値。() は残存値。

(3) 製作技術

金属工芸の研究において、孫機は、溶接技術と象嵌技術の具体的な流れを推測し、西アジアで最初に現れたと指摘した（孫 2013）。藤井和夫は、馬蹄形帯金具の細線細工・粒金細工を復元した（藤井 2006）。近年では、譚盼盼などの研究者は、大連市営城子2003M76号墓例と平壤石岩里9号墓例の自然科学的な分析が行われ、エネルギー分散型 X 線分光法（SEM-EDS）などを通して貴重なデータが蓄積されている（盧ほか 2016；譚ほか 2019）。

(4) 馬蹄形帯金具の性格

韋正は、安郷劉弘墓例が装身具の玉器とともに「朝服葬」に用いられると推測した（韋 2002）。町田章は、樂浪漢墓から出土した馬蹄形帯金具が、「漢の政府が辺郡や属国の官人・王・豪族などに対して身分を象徴する一種の勲章として贈与したもの」と想定した（町田 1987 p.87）。志賀和子は、町田の観点に踏まえて、さらに「漢の郡県制度に組み込まれた異民族の指導者層に与えられたことから、彼らが内臣となって、その性格が変化していったように、鉸具もすでに王朝内部の身分制度を体現するものとして変化していった」と推測した（志賀 1994b p.22）。

漢晋期の馬蹄形帯金具は、1950年代に晋寧石寨山7号墓から出土して以来、2019年までに合計29例が報告されている（表1）。そのうち出土地が確実な発掘資料は20例であり、中国で15例、朝鮮半島で5例が確認されている。そのほかの9例は、出土地が不明な資料であり、台北故宫博物院が1例、上海博物館が1例、Miho Museumが1例、メトロポリタン美術館が4例、Pierre Uldry コレクションが1例、個人コレクションが1例を所蔵していることが確認できる。

(5) 小結

先行研究を振り返ると、馬蹄形帯金具について様々な指摘がなされているが、いずれの先行研究も資料が充実しつつある現状からみれば、分析対象とした資料が限定されている。また、馬蹄形帯金具の用語も研究者によってまちまちであることを指摘できる。

そして、馬蹄形帯金具について対象資料を可能なかぎり悉皆的に集成し、それを踏まえて材質、文様、製作技法といった基礎的な情報を整理する。そのうえで分類をおこない、各類の変遷と製作時期について考古学的に検討することで、馬蹄形帯金具からうかがえる地域間交流について簡単に考察したい。

2 名称と分類基準

分析する前に、馬蹄形帯金具に関する用語と分類基準を明瞭にしておく

(1) 各部位の名称

「鉸具」という名称は、日本学界に幅広く用いられ、古代の帯留金具を指す。漢代以降の帯の上に飾った各種金具は、「校具」であると王国維が考証した(王 1959)。そもそも鉸具は「校具」の仮借の可能性があり、帯留ではなくて古代の車馬具の飾り物全般を指す。また帯留金具のみならず、腰帯に付属する金具も馬蹄形を呈し、金銀製打出鉸具という呼称は概括的ではないと考えているため、ここでは馬蹄形帯金具と呼んでおきたい。

本稿では、馬蹄形帯金具の部位名称について、藤井康隆が使用する晋式帯金具の呼称方法を使用したい。具体的には「鉸具」を「帯扣金具」、「刺金」を「扣舌」、帯の端に付けた帯扣金具と対向する金具を「帯先金具」と呼ぶ(藤井 2014 p.97)。「帯銚」と呼ばれる帯に装飾する金具は、形状などに基づいて「馬蹄形銚」「矩形銚」と細分名を付けたい。馬蹄形帯金具によって金具の構成はやや異なり、慕容鮮卑部に使用される帯金具が帯扣金具・帯先金具・帯銚からなり、そのほかは帯扣金具のみある。

帯扣金具は、金属板・扣舌・扣舌を取り付ける針金や円環からなる。アメリカのメトロポリタン美術館所蔵例①を帯扣金具の例として、金属板は内外の装飾区に分かれ、二重の金線で囲まれる装飾区を外区とし、内区は龍文や動物文を施す。帯扣金具の弧状を呈する一端には、帯本体を貫通するために、三日月孔がある(図1)

(2) 分類基準

本稿では馬蹄形帯金具を分類するにあたり、材質、文様、製作技法という3つの属性に着目したい。表2のように、馬蹄形帯金具は形態にもかかわらず多様な材質がもちいられており、採用された文様からして思想的な背景もうかがえる。また、その製作技法も多様であり、それぞれの技法には多様な系譜が読みとれるからである。

①材質

すでにふれたように、馬蹄形帯金具の材質は多様であり、銀、金、金銅(鉄地金張を含む)、玉に大別される。

②文様

馬蹄形帯金具にみられる文様には虎文、龍文A、龍文B、動物文(飛馬文、イノシシ文など)がある(図2)。虎文は動物文に含めるべきという意見があるかもしれないが、虎・龍は古くから漢民族に深層的な観念世界に繋がる伝統的な文様の一つであり、ここでいう動物文は騎馬民族系の文様をさすため、虎文とは別にしてあつかう。なお、龍文については、龍文Aと龍文Bに細分することができる。具体的にいうと、龍文Aは龍の頭部を横からみて平面的に表現したものであるのに対し、龍文Bは龍の頭部をななめからみて立体的に表現しているという違いがある。

漢晋期における馬蹄形帯金具の分析に関する視点

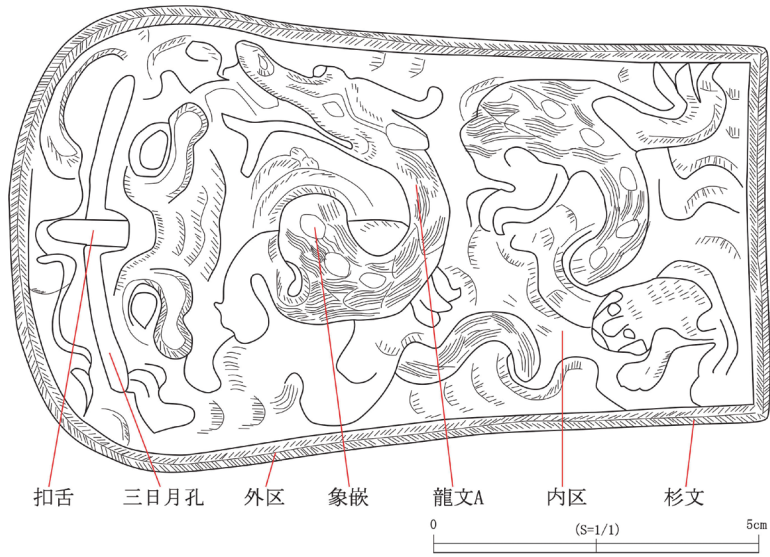


図1 帯扣金具の部位の名称

表2 馬蹄形帯金具分類案

材質				文様モチーフ				製作技法					分類
銀	金	金銅	玉	虎文	龍文A	龍文B	動物文	打出	象嵌	溶接	透彫	浮彫	
◎	○			◎			○	◎	◎				A
◎	○				◎			◎	◎				B
	◎					◎		◎	◎	◎	○		C
			◎			◎			○		○	○	D
		◎					◎	◎	◎				E

*◎は各項目の主体となるもの、○は少数のもの。

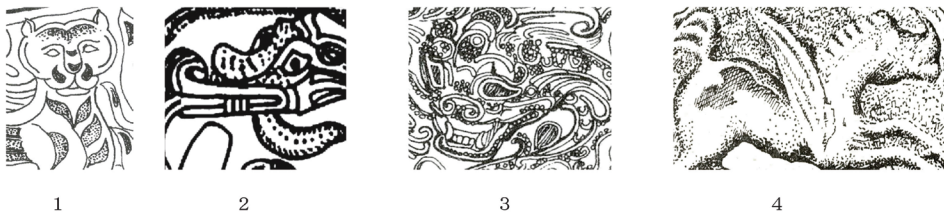


図2 馬蹄形帯金具の文様

1. 虎文 2. 龍文A 3. 龍文B 4. 動物文のうち飛馬文



図3 前漢期の打ち出し技法

1. 満城1号墓の車馬具 2. 南越王墓の杏型金飾 3. 海昏侯墓の馬具 (縮尺不明)

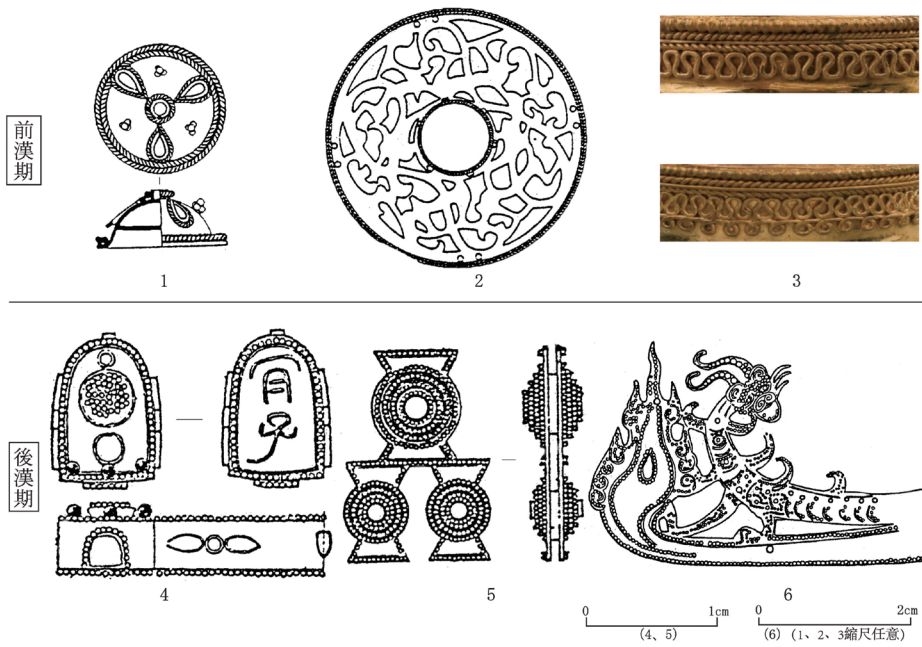


図4 漢代の細金細工

1. 南越王墓の金飾釦 2. 満城1号墓の金飾 3. 海昏侯墓の馬蹄金局部 4. 甘泉2号漢墓の金飾
5. 甘泉2号漢墓の勝形飾 6. 甘泉2号漢墓の龍文飾



図5 A類帯金具の事例

1. 貞柏洞37号墓例 2. 晋寧石寨山7号墓例 3. 晋寧石寨山12号墓例
4. メトロポリタン美術館所蔵例③



図6 B類帯金具の事例

1. 牡宜遺址4号墓例 2. 羊甫頭墓地収集例 3. 貞柏洞92号墓例 4. 貞柏洞2号墓例
5. 石岩里219号墓例 6. メトロポリタン美術館所蔵例②

③製作技法

馬蹄形帯金具の製作には多様な技法がもちいられているが、本稿では打ち出し、溶接、透し彫り、浮き彫りという5つの技法に着目する。このうち、打ち出し技法と溶接技法については簡単にふれておきたい。

打ち出し技法 打ち出し技法は金属製の板を裏側から打ち出すことによって文様を浮き彫り風に表現する技法である。西アジアにおいて古くから存在したものであるが、シルクロードの草原の道を通じ、中国の北方草原に波及したと考えられる。出土遺物からみると、紀元前2世紀末には漢王朝が打ち出し技法を取り入れ、遊牧文化の面影を窺える金工製品が大量に出現するようになった。

例えば、河北省にある満城1号墓（紀元前113年）から出土した銀製品のうち（中国社会科学院考古研究所 1980）、車馬具である馬面の周縁には小さな円形文を打ち出している（図3-1）。広州市にある南越王墓（紀元前124年）から出土した杏形金飾は（南越王墓博物館 2007）、角をもつヒツジの文様を浮彫り風に打ち出したのち、線彫技法で文様の細部を表現する（図3-2）。江西省南昌市にある海昏侯墓から出土した馬具である馬面は、ヒツジの頭部をもつ馬文を打ち出す（図3-3）。

上記のように、漢王朝に北方草原の打ち出し技法を導入されたのは、紀元前2世紀末にあると推測している。

溶接技法 金線や金粒の製作は、すなわち細線細工や粒金細工であり、藤井和夫が「拡散熔融接合」と呼称する。藤井は、細線細工と粒金細工の過程を復元し、溶接技法が前漢までに西アジアから中原地域へ波及し、高度に熟練した技術が中国の伝統的な文様である龍文と融合して馬蹄形帯金具を創出されたと想定している（藤井 2006）。

中国における溶接技法の最古の確認例は、上でもふれた前漢初期の南越王墓から出土した金飾釦であり（図4-1）、少量の金粒と金線を溶接している。また、河北省満城1号墓が出土した金飾は、周縁に金粒を溶接する（図4-2）。南昌市海昏侯墓から出土した70点余りの馬蹄金・麟趾金が注目すべきであり（江西省文物考古研究所 2016）、馬蹄金にΩ字形金線を溶接する（図4-3）。これは馬蹄形帯金具にもみられる装飾で、その製作年代を考えるうえで重要な要素であり、この点については後述する。

なお、後漢前期になると、こうした金線や金粒を大量に溶接するようになる。図4のように、金飾に金粒が密集して溶接され、当該期における細金細工の技法は前漢より熟練した様相が現れる。例えば江蘇省揚州市にある甘泉2号漢墓（67年）は、細金細工の金製品が多数出土した（図4-4、5）。そのうち龍文飾は（図4-6）、薄い金板に金粒を溶接して、龍文の頭部が龍文Bと基本的に同じ細部である。伴出遺物のうち王冠形の金製品とガラス器は、西アジアからの伝来品である（南京博物館 1981）。打ち出し技法と同様に、紀元前2世紀末には漢王朝が溶接技法を取

り入れていたことがわかる。

3 分類試案

上では馬蹄形帯金具の材質、文様、製作技法という3つの属性を取りあげ、それぞれの属性にどのような要素がみられるかを提示した。本稿では、これらの要素の出現頻度を組み合わせることで馬蹄形帯金具の分類をおこなうが、それをまとめたものが表2である。それによれば、馬蹄形帯金具はA～E類という5つの類型に分類可能である。

(1) A類

A類は銀板に虎文を打ち出したものを主体とするが、金板にヒツジの文様を打ち出したものもある。現状では、貞柏洞37号墓例(図5-1)、晋寧石寨山7号墓例(図5-2)、石寨山12号墓例(図5-3)、メトロポリタン美術館所蔵例③(図5-4)が合計4例ある。

例えば晋寧石寨山7号墓例は、銀板の折り曲げは3～5mmの幅で、等距離に15個の円孔が穿たれている(雲南省博物館 1959; 志賀 1994a)。三日月孔も裏面に折り曲げ、扣舌の根元は銀板を取り付ける。弧形の先端の両側には対称な孔があり、象嵌された玉石が7個残存する。蹴り彫りにした刻線の中には、金箔が貼り付けられている。左向きの虎文は、両眼に玉石をはめ込む。胴体には翼があり、右前肢が火炎状の芝草を持っている。左後肢に刻まれた点と線は、三日月の形を呈する。

(2) B類

B類は、銀板に龍文Aを打ち出したものである。現状では、文山牡宜遺址4号墓例(図6-1)、昆明羊甫頭墓地収集例(図6-2)、平壤貞柏洞92号墓例(図6-3)、平壤貞柏洞2号墓例(図6-4)、平壤石岩里219号墓例(図6-5)、メトロポリタン美術館所蔵例①(図1)と所蔵例②(図6-6)の7例がある。

文山牡宜遺址4号墓を例として、本例は雲南省文山自治州広南県の黒支果郷にあり、2011年に発掘された(萬 2019)。本例(重さ51g、厚さ1mm)は金製品であり、本来表面には丸い玉石が象嵌してあり、1個のみ残存している。裏面に打ち出された龍文は、頭が帯金具の左上にある。龍の頭部の下に頭を下向きにした小さい獣文があり、口部に扣舌を取り付けた。文様の上に刻線で体毛と雲気を表現し、外区には杉文を施す。帯金具の縁辺はほぼ垂直に折り曲げ、帯本体に取り付けるために、数個の円孔が穿たれている。

(3) C類

C類は金板に龍文Bを打ち出し、溶接技法によって金粒や金線をもちいた装飾がほどこされ

ている点が特徴である。現状では、安郷劉弘墓例、平壤石岩里9号墓例、大連営城子2003M76号墓例、寿県劉延墓例、焉耆博格達沁古城例、天水市博物館所蔵例、Miho Museum 所蔵例、個人コレクション例、Pierre Uldry コレクション例の9例が該当する。C類では、外区に連続したΩ字形の金線を溶接しており（図7-1、2）、これは他の金製品にもみられる装飾であり、製作年代を考えるうえで重要な要素である。

平壤石岩里9号墓例（重さ53.6g、厚さ0.3～0.7mm）は、外区の中には連続的なΩ字形の金線を溶接する（関野ほか 1927；梅原ほか 1959；国立中央博物館 2001）。内区は大龍1匹で、扣舌の両側などの部位に小龍7匹を装飾している（図7-1）。

安郷劉弘墓から出土する帯扣金具は、金属板・扣舌・扣舌を取り付ける針金や円環からなる。外区は二重の金線で囲まれる装飾区であり、内区に龍文や動物文を打ち出している（図7-2）。

大連営城子2003M76号墓例（重さ38.2g、厚さ0.18mm）は、平面形状が前円後方の馬蹄形を呈する。扣舌が楔形を呈し、根元を円環で金板に取り付けている（大連市文物考古研究所 2019）。金板の縁は裏面に折り曲げ、等間隔に19個の穴が開いている。外区は連続の菱形枠の中に玉石を嵌め込み、9つの緑松石が残存している。外区の外側には、反時計回りの捻られた金線が溶接されている。内区は打ち出し技法で突出する文様を飾り、1匹の大きな龍とその周囲に9匹の小さな龍というモチーフである。複数の龍文は、いずれも金粒を1本溶接して胴体を表現する。

Miho Museum 所蔵例は、文様を打ち出して金粒・金線で龍文を8匹施している（Miho 1998）。龍文の細部は捻られた金線で表し、菱形繋ぎの外区文様帯と内区に緑松石を象嵌している。円環で扣舌を金板に取り付け、三日月孔が劉延墓例と同じように狭くなっている。

(4) D類

D類は材質が玉で、龍文Bを透し彫りや浮き彫りで表現したものである。現状では3例が該当する。洛陽東関夾馬宮路後漢C3M15墓例は（図8-1）、三日月孔に扣舌を取り付けるための凹みがある。表面は龍文を3匹浮き彫りし、裏面が滑らかであり、9箇所穿孔がある（洛陽市文物工作隊 1984）。

台北故宮博物院所蔵例は、浮き彫りにした1匹の大龍と4匹の小龍を施し、後端の中部に頭が左向きになるカメを飾る（孫 2013）（図8-2）。

上海博物館所蔵例は、外区の裏面には銘文が刻まれていて、それぞれ「將臣范許/奉車都尉臣程涇令/奉車都尉関内侯臣張余」の22字と「庚午御府造/白玉袞帶鮮卑頭/其年十二月丙辰就/用工七百」という24字がある（王 1999）。

(5) E類

E類は金銅鍍金の板（あるいは鉄芯を貼る金板）に動物文を打ち出したものである。帯扣金具・



図7 C類帯金具の事例

1. 平壤石岩里9号墓例 2. 安郷県劉弘墓 3. 焉耆博格達沁古城黑圪塔墓地収集例

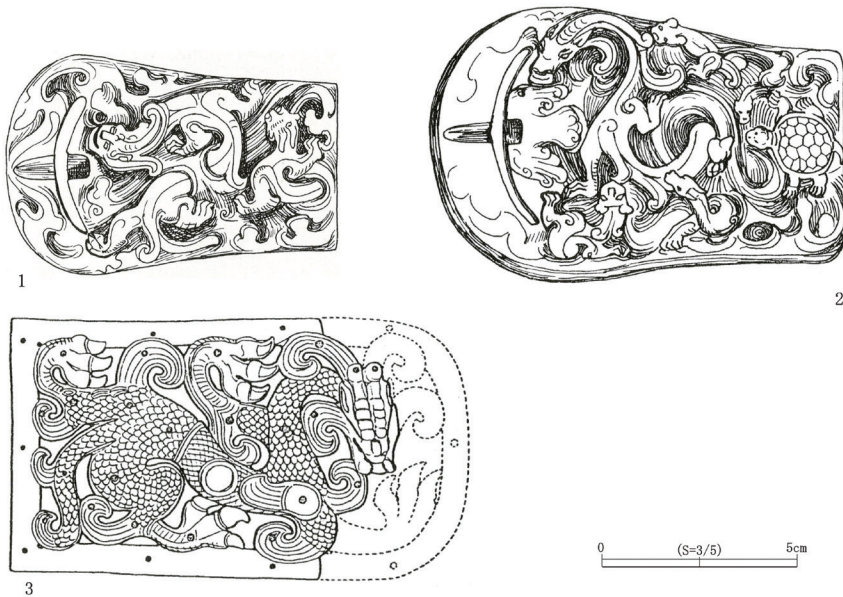


図8 D類帯金具の事例

1. 洛陽東関夾馬營路 C3M15墓例表面 2. 台北故宮博物院所蔵例 3. 上海博物館所蔵例

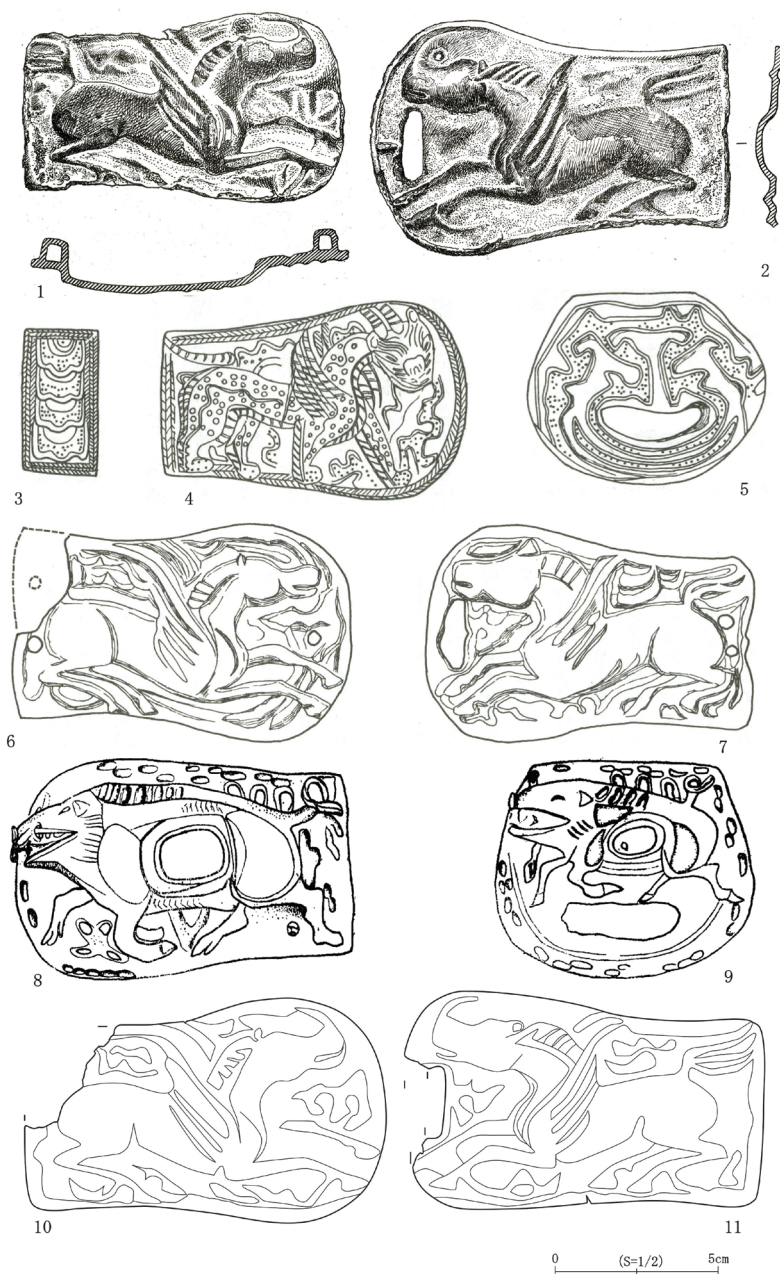


図9 E類帯金具の事例

1. 楡樹市老河深105号墓例帯先金具 2. 同前例帯扣金具 3. トウムド左旗討合気墓例矩形鍔
 4. 同前例帯先金具 5. 同前例馬蹄形鍔 6. ツライノール1号鮮卑墓例帯先金具 7. 同前例帯扣金具
 8. 和林格爾県鮮卑墓例帯先金具 9. 同前例馬蹄形鍔 10. メトロポリタン美術館所蔵例④帯先金具
 11. 同前例帯扣金具

帯先金具・馬蹄形鍔という複数の部材から帯金具を構成する点が特徴であり、現状では、榆樹老河深105号墓例（図9-1、2）、56号墓例、トゥムド左旗討合気墓例（図9-3～5）、ツライノール1号鮮卑墓例（図9-6、7）、和林格爾県鮮卑墓例（図9-8、9）、メトロポリタン美術館所蔵例④（図9-10、11）の6例が該当する。

例えば吉林省榆樹市に位置する老河深105号墓で、出土した馬蹄形帯金具の材質は青銅メッキである（吉林省文物考古研究所 1983）。帯扣金具と帯先金具の一端に楕円形の孔を持ち、有翼の一角獣を施す。馬蹄形鍔の一端は弧状を呈し、3個の穿孔がある。

ここまで馬蹄形帯金具がおおきく5つの類型に分類できることを示した。以下ではこの分類に基づいて各類型がどのように変遷したのか、馬蹄形帯金具の特徴や共伴遺物などをもとに検討したい。

4 変遷の試案

(1) 各類における技法の差異

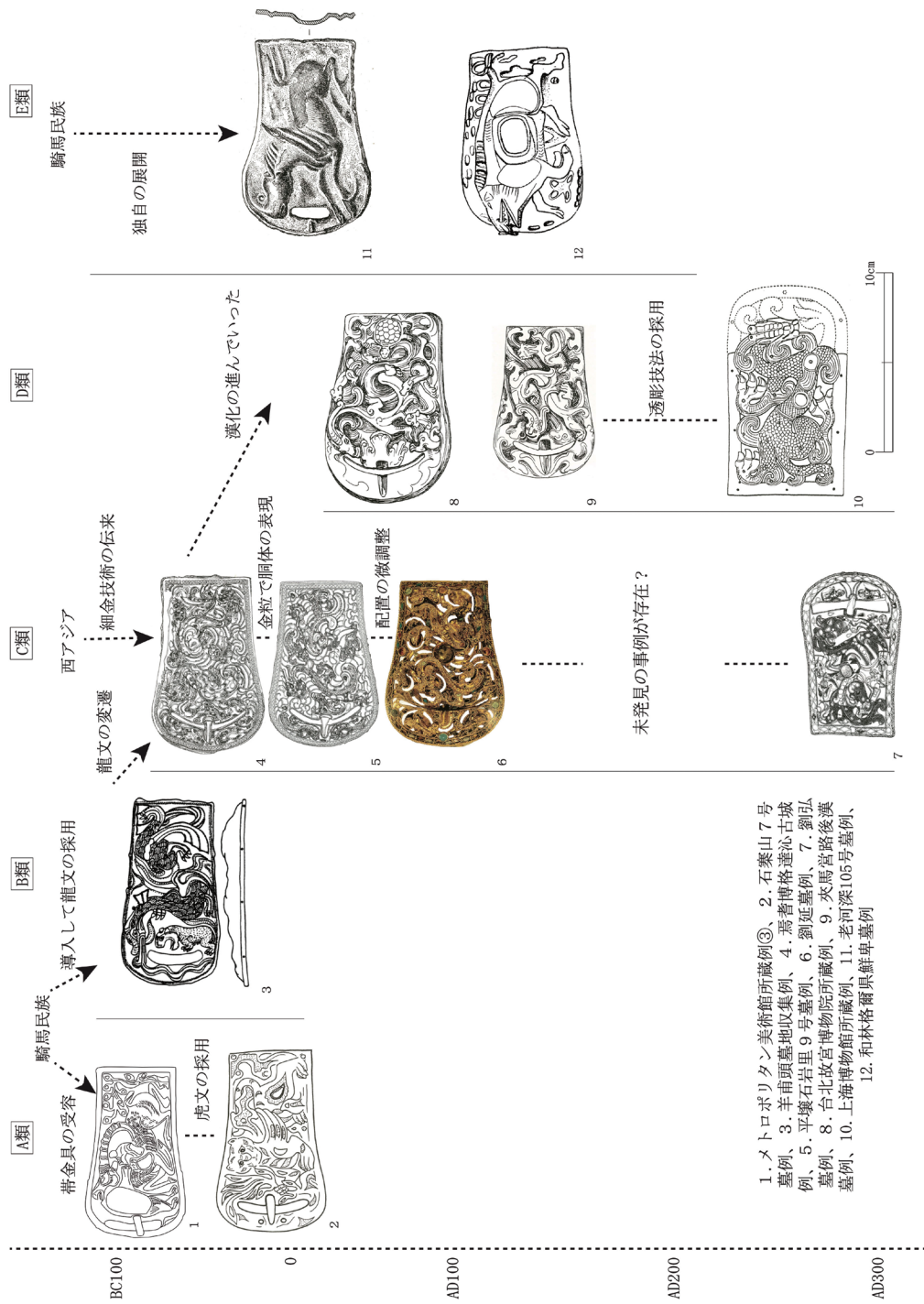
A類とB類帯金具の文様モチーフは異なるが、製作技法において両方とも打ち出し技法、線彫技法、象嵌技法を用いて文様を施す。C類は龍文を打ち出して、金線や金粒を「拡散鎔融接合」という溶接技法で龍文の各部位を飾る。D類帯金具の材質は青銅や鉄地金貼りであり、打ち出し技法のみを用いて動物文を表現するのが特徴的である。E類は玉製品であり、浮き彫りや透彫りの技法を用いて文様を表現する。

(2) 馬蹄形帯金具の変遷

図10の明らかなように、馬蹄形帯金具の各類の関係や変遷を明示しており、以下では具体的に分析する。

A類のうち、メトロポリタン美術館所蔵例③と晋寧石寨山12号墓例は、帯金具の火炎状の芝草文が同じである。前者の文様モチーフは北方草原の動物文牌飾と強い親縁性を持つため、漢王朝が北方草原の帯金具を受容し始めたものと推測する。平壤貞柏洞37号墓例の縁に打ち出した円形文が満城1号漢墓の馬面と同じ技法を用いる。そのため、A類は紀元前1世紀の前漢中末期にあたる。技法からみると、B類はA類とほぼ同じであるが、漢王朝の伝統的な文様である龍文Aを打ち出したものであるため、若干後出するものと考えている。

E類は中国北方の草原地帯に分布し、金具の組み合わせ・材質・文様モチーフからみると、北方系青銅文化の動物文牌飾と強い親縁関係がある。伴出遺物として、ツライノール1号鮮卑墓の方格規矩鏡、老河深遺跡中層の56号墓の七乳獸帯鏡など後漢期の銅鏡が出土した（吉林省文物考古研究所 1987）。伴出遺物を合わせて考えると、E類はA類・B類より若干後出し、前漢末～後漢期に位置付ける。



1. メトロポリタン美術館所蔵例③、2. 石炭山7号墓例、3. 羊甫頭墓地収集例、4. 嵩着博格達沁古城例、5. 平壤石岩里9号墓例、6. 劉延墓例、7. 劉弘墓例、8. 台北故宫博物院所蔵例、9. 茨焉營路後漢墓例、10. 上海博物館所蔵例、11. 老河深105号墓例、12. 和林格爾爾具鮮卑墓例

図10 漢晋期の馬蹄形帶金具の分類と変遷試案

製作技法の分析により、C類のうち最古の事例は、帯金具の外区にΩ字形の金線を溶接するものと考えている。また、溶接技法の発展を考慮すると、連続の金粒を溶接して龍文の胴体を表現するのはより熟練な技法である。当該期の製作技法をもとに、焉耆県博格達沁古城例、個人コレクション例、Pierre Uldry コレクション例は紀元前1世紀後半の前漢末期に位置づける。大連市営城子 M76号墓例、寿春劉延墓例、美秀美術館所蔵例は、外区の装飾として、Ω字形の金線の代わりに、玉石を象嵌する菱形枠になっていったため、C類のうち若干遅れるものであり、紀元1世紀の新莽期～後漢前期にあたと考えられよう。

馬蹄形帯金具の三日月形孔は広くなる変化傾向があり（劉ほか 2015）、劉弘墓例の製作年代はC類のうち最も新しい時期と推定している。製作年代は具体的に知るすべがないが、伴出遺物および出土墳墓の年代からみれば、西晋期にあたと推測している。C類の一例として、後出する本例は同類の帯金具とはかなり時間的な隔りがあり、未発見の事例の存在と想定している。

D類は玉製品であり、文様から見れば、B類・C類の影響を受けてより中国化したものと指摘される（志賀 1994b）。資料が数少ないので、技術的変遷を推定しづらい。伴出遺物および出土墳墓から推察すれば、洛陽夾馬營路後漢墓例を後漢に位置付けたい。上海博物館所蔵例は銘文があり、製作年代は西晋期にあたと考えられる。

5 考 察

以上の分析からみると、馬蹄形帯金具は、まず紀元前2世紀末の前漢中期に中国北方の草原地帯の帯金具を祖形として、ヒツジなどの草原動物文を打ち出したものが漢王朝に出現した。漢民族的信仰の四神である虎文・龍文を用いて、漢王朝はA類・B類を製作するようになった。そして紀元前1世紀後半の前漢末期以降、龍文Bと溶接技法を取り入れるC類が特徴的である。

変遷の分析を通じ、A類・B類は溶接技法を使用しないが、若干後出するC類が細金細工が盛んになる。この現象は、溶接技法の受容に関係があると考えられる。当該期に、漢帝国はローマ帝国と貿易の往来が頻繁に行われ、相互にガラス器及び絹織物などを取り引きしていたと指摘される（Thorley 1971）。

一方、北方の草原地帯に分布するE類は、騎馬民族が使用したものと考える。馬蹄形帯金具の規格を統計的に分析することにより、A・B・E類は数値的近縁性を持ち、ほぼ並列関係を想定する。ほかの類と比べれば、C類帯金具はより小さく、各事例の法量の差が小さい分布特徴を持つ（図11）。C類の製作の際に、より均一の基準は存在したと想定する。

おわりに

馬蹄形帯金具は漢晋期の東アジア地域に分布し、分析を通じてその製作の盛期が紀元前1～紀元1世紀にあることを提示した。本稿で示した分類・変遷案は、馬蹄形帯金具の様相やその祖形

を明らかにし、当該期の地域間の交渉を分析する有効な試みと考える。

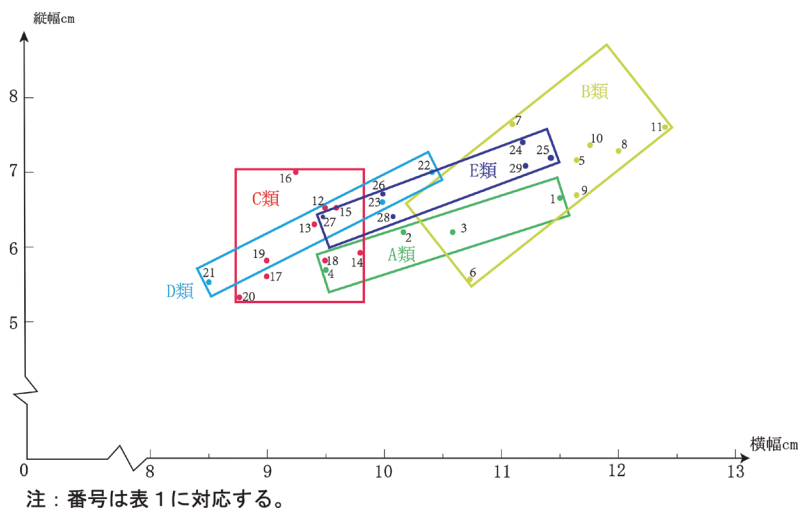


図11 馬蹄形帯金具の法量散布図

後記：本稿は中国国家留学基金の助成を受けた成果です。日頃からご指導を頂いている城倉正祥先生をはじめ、加藤一郎氏、城倉ゼミの方々に感謝申し上げます。

引用文献

【日本語】

- 大谷 育恵 2013「飛馬文帯再考」『金沢大学考古学紀要』34, pp.11-19
- 榎本 杜人・中村 春寿 1975『楽浪漢墓 第2冊』, 奈良：楽浪漢墓刊行会
- 志賀 和子 1994a「漢代「北方系」帯金具考（上）—金銀製打出し鉸具について—」『古代文化』第46巻第7号, 京都：古代学協会, pp.390-400
- 志賀 和子 1994b「漢代「北方系」帯金具考（下）—金銀製打出し鉸具について—」『古代文化』第46巻第8号, 京都：古代学協会, pp.451-460
- 西漢南越王博物館 2007『西漢南越王博物館珍品図鑑』, 北京：文物出版社
- 関野 貞ほか 1927『楽浪郡時代の遺蹟：本文』古蹟調査特別報告第4冊, [京城]：朝鮮総督府
- 藤井 和夫 2006「金製龍文鉸具制作技法に関する覚書」『高麗美術館研究紀要5』有光教一先生白寿記念論叢, 京都：高麗美術館研究所, pp.95-109
- 藤井 康隆 2014『中国江南六朝の考古学研究』, 東京：六一書房
- 町田 章 1970「古代帯金具考」『考古学雑誌』第56号第1巻, 東京：日本考古学会, pp.33-60
- 町田 章 1985「匈奴式帯金具の変転」『末永先生米寿記念献呈論文集』坤, 奈良：奈良明新社, pp.1615-1623

【中国語】

- 安郷県文物管理所 1993「湖南安郷西晋劉弘墓」『文物』第11期, 北京：文物雜誌社, pp.1-12
- 大連市文物考古研究所・大連營城子漢代墓地考古工作队 2019「遼寧大連市營城子漢墓群2003M76的発掘」『考古』

漢晋期における馬蹄形帶金具の分析に関する視点

第10期, 北京: 考古雜誌社, pp.52-62

江西省文物考古研究所・南昌市博物館・南昌市新建區博物館 2016「南昌市海昏侯墓」『考古』第7期, 北京: 考古雜誌社, pp.45-62

韓翔 1982「焉耆國都、焉耆都督府治所与焉耆鎮城—博格達沁故城調查—」『文物』第4期, 北京: 文物雜誌社, pp.8-12

吉林省文物考古研究所 1983『榆樹老河深』, 北京: 文物出版社, pp.64-66

林梅村 2017『西域考古与芸術』, 北京: 北京大学出版社

劉復興 2017『漢代掐絲焊珠七龍文帶扣』, 『文物春秋』第6期, 石家莊: 文物春秋雜誌社, pp.73-76

劉金友・王飛峰 2015「大連營城子漢墓出土金帶扣及其相關研究」『北方文物』第3期, 哈爾濱: 北方文物編輯部, pp.24-27.37

陸思賢 1984「和林格爾縣另皮窰村北魏墓出土的金器」『內蒙古文物考古』第3期, 呼和浩特: 內蒙古文物考古雜誌社, pp.52-54

黎忠義 1985年「漢-唐鑲嵌金細工工藝探析」『東南文化』第1期, 南京: 東南文化編輯部, pp.158-167

洛陽市文物工作隊 1984「洛陽東閭夾馬營路東漢墓」『中原文物』第3期, 鄭州: 中原文物編輯部, pp.43-49

南京博物院 1981「江蘇邗江甘泉二號漢墓」『文物』第11期, 北京: 文物雜誌社, pp.1-10

孫機 2013「中国古代的帶具」『中国古輿服論叢(增訂本)』, 上海: 上海古籍出版社, pp.247-284

譚盼盼・張翠敏・楊軍昌 2019「大連營城子漢墓出土龍文金帶扣的科學分析与研究」『考古』第12期, 北京: 考古雜誌社, pp.106-115

萬楊 2019「話說牡宜遺址出土的金帶扣」『雲南考古』, URL: <http://www.ynkg.cn/html/month/20190225110935.htm>

王国維 1959「胡服考」『觀堂集林』, 北京: 中華書局, pp.1069-1113

王正書 1999「上博玉雕精品鮮卑頭銘文補釋」『文物』第4期, 北京: 文物雜誌社, pp.50-53

韋正 2002「東漢、六朝的朝服葬」『文物』第2期, 北京: 文物雜誌社, pp.72-78

許建強・邱雪峰 2014「安徽省壽縣壽春鎮計生服務站東漢墓遺物及其相關問題」『東南文化』第3期, 南京: 東南文化編輯部, pp.46-52

楊一一・管理・李文歡ほか 2018「西漢廢帝海昏侯劉賀墓出土馬蹄金、麟趾金花絲紋樣的製作工藝研究」『南方文物』第2期, 南昌: 南方文物編輯部, pp.102-107

伊克堅・陸思賢 1984「土默特左旗出土北魏時期文物」『內蒙古文物考古』第3期, 呼和浩特: 內蒙古文物考古雜誌社, pp.55, 51

雲南省博物館 1959『雲南晉寧石寨山古墓群發掘報告』, 北京: 文物出版社

雲南省文物考古研究所・昆明市博物館・官渡區博物館 2005『昆明羊甫頭墓地』卷三, 北京: 科學出版社, pp.857-858.836

張增祺 1998『晉寧石寨山』, 昆明: 雲南美術出版社

鄭隆 1961「內蒙古扎賚諾爾古墓群調查記」『文物』第9期, 北京: 文物雜誌社, pp.16-19

中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理处 1980『滿城漢墓發掘報告(上)』北京: 文物出版社

【韓国語】

국립중앙박물관 2001『낙랑』, 서울: 國立中央博物館。

노지현・유혜선 2016「석암리 9호분 출토 금제띠고리의 제작 방법 고찰」『박물관보존과학』제17집, pp.1-16

사회과학원 고고학연구소 전야 공작대 1983『낙랑 지역 일대 고분 발굴 보고서』고고학 자료집 6, 평양: 과학백과사전출판사

“조선유적유물도감” 편찬위원회 1989『조선유적유물도감』2, 평양: “조선유적유물도감” 편찬위원회

조선 사회과학원 고고학연구소 1978『목곽 묘』고고학 자료집 5, 평양: 과학 백과사전출판사

【英語】

Emma C. Bunker, Watt, James C. Y., Zhixin Sun. *Nomadic art of the eastern Eurasian steppes: the Eugene V. Thaw and other New York collections*. New Haven: Yale University Press, 2002.

Miho Museum. *Miho Museum 開館一周年記念図録*. 信楽町 (滋賀県): Miho Museum, 1998.

図表出典一覧

図1 <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/59569>の写真をトレースして作成。

図2-1 [張増祺 1998] p.261, 図69部分転載。図2-2 [雲南省文物考古研究所ほか 2005] p.858, 図695-1部分転載。

図2-3 [孫 2013] p.261, 図18-15-1部分転載。図2-4 [吉林省文物考古研究所 1983] p.65, 図58-2部分転載。

図3-1 [中国社会科学院考古研究所ほか 1980] 図135-1転載。図3-2 [西漢南越王博物館 2007] p.63転載。図

3-3 [江西省文物考古研究所ほか 2016] p.62, 図59を転載。

図4-1 [西漢南越王博物館 2007] p.62転載。図4-2 [中国社会科学院考古研究所ほか 1980] 図79-2転載。図

4-3 [楊一一ほか 2018] p.103, 図3転載。図4-4~6 [黎忠義 1985] p.158, 図1, p.160, 図7転載。図4-

6 [黎忠義 1985] 転載。

図5-1 [孫 2013] p.260, 図18-14-3転載。図5-2 [孫 2013] p.260, 図18-14-2転載。図5-3 [張増祺 1998] p.261,

図69転載。図5-4 [Emma C et.al 2002] p.113, 図83をトレースして作成。

図6-1 [萬楊 2019] 写真をトレースして作成。図6-2 [雲南省文物考古研究所ほか 2005] p.858, 図695-1転載。

図6-3 [志賀和子 1994a] p.392, 図2-1転載。図6-4 [志賀和子 1994a] p.394, 図4-3転載。図6-5 [孫 2013]

p.260, 図18-14-1転載。図6-6 [Emma C et.al 2002] p.116, 図8-6をトレースして作成。

図7 [孫 2013] p.261, 図18-15転載。

図8 [孫 2013] p.262, 図18-16転載。

図9-1、2 [吉林省文物考古研究所 1983] p.66, 図59転載。図9-3~5 [孫 2013] p.267, 図18-20転載。図9-6、

7 [町田 1987] p.51, 図12-4転載。図9-8、9 [陸 1984] p.53, 図1転載。図9-10、11 [Emma C et.al 2002]

p.115, 図85の写真をトレースして作成。

図10 筆者作成。

図11 筆者作成。

表1 筆者作成。

表2 筆者作成。